

久礼ノ川の伝説～酒井明 説話集 17※～

平田から三原に向けて谷あいを行くと、右にそれる道があります。その道を奥へ奥へと入って行くと久礼ノ川です。中筋川ダムで、様子がだいぶ違って来たが、静かな山里の空気をとどめています。

ここもまた古い昔から、人々のくらしの場であったことを物語るいろいろなものが残されています。

ある日この地を訪れて、中市、荒瀬に残る弘法大師にまつわる口伝と同じ話を聞きました。

大師は、この地を開山して修行の場に、と山々谷々をまわられたが、谷数が1つ足りない。平田黒川の奥の隠れ谷、という所に住むあまのじゃくが、そのひとつを隠しておいたというのです。

それに加えてこの地にあった、いちいの大木。里人が切ろうとのこぎりを引いたがどうしても倒せず、翌朝行くと元通りに直っています。こうしたことが何日か続くので、ある晩そっと様子を見に行くと、どこからともなく小坊主が集まって根元を接ぎながら

「切っても無駄だが焼いたらええのに」と話しているのです。

それを聞いた里人は、あくる日その根元に火をつけ、7日目にやっと木が倒れました。

しかし、不思議なことにその晩から、倒れたいちいの枝に静かに燃える99の灯明がともり始めたというのです。

これを知った大師は「谷は隠されても、せめていちいが残っておれば、ここに開山したものを」と残念そうに言い残して、立ち去られたということです。

こうした山里の秋、思い出す様に土地の古老は静かに話してくれるのでした。

※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会(当時)長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。

